

## 基礎看護学実習 I における学生が意味づけした経験に関する研究

## Study on Significances of Student's Reports after Fundamental Nursing Practice I

浅井 直美, 上星 浩子, 小山 英子, 三木 園生

## 要 約

基礎看護学実習 I における学習活動の効果を評価するために、学生が実習後に記述し意味づけした経験の特徴を明らかにした。短期大学看護学科1年次に在籍する29名のレポートを分析対象とし、質的帰納的研究技法によって抽出した299の経験を内容分析した。結果、学生が意味づけした経験は29のサブカテゴリーに分類され、意味内容の類似性によって、(1) 初めて患者と関わり援助しとまどう、(2) 直接見ることや他者と関わる中で、看護の知識を広げる、(3) 自己の援助の振り返りにより自己評価し改善点に気づく、(4) 感情を伴いながら患者と関係性を築く、(5) 自己を洞察し自己の今後の課題を見つける、(6) メンバー同士の協力や他者からのフィードバックを受け入れる、の6つのカテゴリーに統合された。

キーワード：基礎看護学実習 I, 看護学生, 経験, レポート

## はじめに

看護基礎教育課程において、臨地実習は極めて重要視されている。厚生労働省は、2001年に看護学教育のあり方に関する検討会<sup>1)</sup>を行った。そこでは、大学における看護実践能力の育成の充実に向けて、検討され、看護実践能力の育成において、臨地実習の充実が求められると示された。また、「看護実践能力の基礎」を確実に習得するためには、臨地実習でしか習得できない能力があり、実習の各段階を重ねることにより確実にその到達目標に向けて習得されていく構成が重要であると報告された。

臨地実習では、主として対象一人を受け持ち、看護過程を中心とした実習が重用視されてきた。しかし、初回の臨地実習では、どのような実習形態が効果的であるのかということは、検討段階である。安酸<sup>2)</sup>は、看護学実習における学生の経験を重要視しており、臨床の中での直接的経験を推奨している。山下<sup>3)</sup>は、面接により言語で表現されたデータを分析し、看護学実習における学生の経験の特徴を明らかにしている。小松<sup>4)</sup>は、基礎看護学実習におけるレポートを分析し、実習目標別に学びの内容を明らかにした。小山<sup>5)</sup>は、基礎看護学実習 I における日々の記録から、学習内容・心情の分析を行い、12

のカテゴリーを抽出している。鶴羽<sup>6)</sup>は、初回臨地実習での学生の実習終了後のレポートを分析し、学生の思考を明らかにしている。しかし、基礎看護学実習において、学生の視点からみた、学生が意味があるとした経験、すなわち、学生が意味づけした経験を明らかにした研究は少ない。

学生が意味づけした経験がどのような特徴をもっているのかを明らかにすれば、学生にとっては自分の経験を意味づけることを促進できる。また、教師にとっては、学生の経験の教材化を検討することができ、さらに、教授方法を検討することができる。

そこで、学生が記述した基礎看護学実習 I の実習終了後の課題レポートの分析を行い、学生自らが意味づけした経験の内容を明らかにした。

## 研究目的

基礎看護学実習 I における、学生が意味づけした経験の内容を明らかにする。

## 用語の操作的定義

「経験」を基礎看護学実習 I において体験したことから、学生自らが、レポートに記述したことにより意味づけした認識内容とした。

## 研究方法

### 1. 研究対象

関東地方のA短期大学看護学科第1学年の学生87名のうち、研究参加に同意した57名の学生を研究対象とした。

研究参加に同意した学生57名の記述レポートから、無作為に抽出し、サブカテゴリーの飽和を確認した19名の記述レポートを分析対象とした。

### 2. データ収集方法

研究に同意が得られた場合は、同意書とともに学生が記録した基礎看護学実習Ⅰの課題レポートとともに提出をしてもらった。59名から研究協力の同意を得た。

### 3. 分析方法

Berelson, B<sup>7)</sup> の内容分析に基づき、以下の手順で行った。

#### 1) 記録単位の抽出

学生が記述したレポートより、実習で体験したことによる認識内容の記述を記録単位とした。一つの文脈の中で、学生の異なる認識内容を表す記述が複数あった場合は、認識内容を表す記述に分割して、複数の記録単位として扱った。

#### 2) カテゴリー化

学生の認識内容の記録単位を、抽象度を高めてサブカテゴリー化した。さらに、個々の内容と全サブカテゴリーの中での位置づけ、各サブカテゴリー間の関係から、サブカテゴリーネームの適切性について検討した上で命名した。サブカテゴリーはさらに高次概念でカテゴリー化し、同様にして命名した。

#### 3) 分析の信頼性・妥当性

データ分析過程においては、信頼性・妥当性を保持できるよう看護教育に携わる教師4名の協議によって行った。

#### 4. 倫理的配慮

研究対象の87名の学生に説明書を用いて研究の趣旨・内容を説明した。説明事項は、①研究の目的、②個人のプライバシーの保護、③研究参加あるいは不参加の場合の利益と不利益、④自由意志による参加と同意撤回の自由、⑤成績には一切関係しないこと、⑥研究成果の公表、⑦研究終了後のデータ等の破棄方法、⑧問い合わせ先、とした。研究協力の同意が得られた場合には、同意書に署名をしてもらった。

## 基礎看護学実習Ⅰの概要

### 1. 実習の位置づけ

保健師助産師看護師学校養成所指定規則第7条の看護師学校養成所の指定基準で示された教育内容（臨地実習）の基礎看護学実習に位置づけられている。基礎看護学実習は、基礎看護学実習Ⅰが1単位、基礎看護学実習Ⅱが2単位、計3単位で構成されている。

### 2. 実施時期

実施時期は、短期大学第1学年次の後期（2月～3月）である。

### 3. 実習の目的および目標

実習の目的は、「看護の対象である患者および患者をとりまく環境を理解し、日常生活の援助技術を実践する。」である。

実習の目標は、以下の通りである。

- ①病院の機能・概要を理解できる。
- ②入院患者の生活の場を理解できる。
- ③患者とコミュニケーションができる。
- ④患者の日常生活を理解できる。
- ⑤患者の基本的ニーズを満たすために必要な日常生活の援助を実施できる。
- ⑥患者との直接的なかかわりをとおして看護に関心がもてる。

### 4. 実習の方法

学内で9時間、病棟で36時間、計45時間、実習する。患者への援助は、看護師・教師の指導のもとで行う。

### 5. 実習のまとめ

実習終了後、「看護基礎看護学実習Ⅰで学んだこと」のレポートを1200字以上1600字以内で提出する。本研究は、この課題レポートを分析対象とした。

## 結果

基礎看護学実習Ⅰにおける記述した学生の経験は、対象19事例のレポートから、305記録単位を抽出した。内容が抽象的なものや意味内容が不明なものを除いた299記録単位を分析した結果、29サブカテゴリーを抽出し、最終的に【初めて患者と関わり援助しとまどう】【直接見ることや他者と関わり、看護の知識を広げる】【自己の援助の振り返りにより自己評価し改善点に気づく】【感情を伴いながら患者と関係性を築く】【自己を洞察し自己の今後の課題を見つける】【メンバー同士の協力や他者からのフィードバックを受け入れる】の6つのカテゴリーを抽出した（表1）。

以下、各カテゴリーを【 】で、サブカテゴリー

表1 基礎看護学実習Iにおける学生が意味づけした経験

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な記録単位	記録単位数
患者と初めて関わり築きとまどう 23記録単位 7.7%	患者と関わるといふ初めての体験でとまどう	「患者と1対1で話すのが、初めてで、とまどった。」	13
	過去に抱いていた患者像と異なり、驚く	「患者が前向きな方であり、驚いた。」	1
	学内演習とは異なる援助の方法で初めて行うことにより、とまどう	「学校で行うやり方とは異なり、とまどった。」	7
	援助して予想外の患者の反応にとまどう	「体位変換時、患者の組ませた手もとに戻ってしまい、清拭の順番が混乱してしまった。」	2
直接見ることや他者と関わる中で、看護の知識を広げる 124記録単位 41.5%	直接見たり触れたりすることにより看護の知識を広げる	「少しの騒音でも病室に響いてしまうことがわかった。」	12
	患者に援助したことで看護の知識が広がる	「清拭時、いかに説明や声かけが大切か改めて学んだ。」「ベッド前が患者の安全にとっても大切なものであることがわかった。」	97
	患者の思考を聞き、看護の知識を広げる	「入院患者しか気づかない、入院生活をしていて思っていたことを、経験になった。」	1
	看護師の思考を聞き、看護の知識を広げる	「看護師の話を聞く。看護師は、患者に対していろいろな対応をしていることがわかった。」	2
	カンファレンスにより看護の知識を広げる	「カンファレンスで、コミュニケーションは、その人に合わせた方法で行う必要があると学んだ。」	8
自己の援助の振り返りにより自己評価や改善点に気づく 48記録単位 16.1%	看護師や教員の技を見て看護の知識を広げる	「看護師の清拭を見学し、患者に実際に話しかけられて、援助を行うことについてもコミュニケーションがとれることがわかった。」	4
	自己の援助の振り返りにより、できない部分を自覚する	「清拭のとき、ただ清潔にするという点しか考えられず、患者の状態をみるということができなかった。」	16
	自己の援助の振り返りにより、できた部分を認める	「援助をするとき、なぜその援助が必要なのか、考えながら行うことができた。」	10
	自己の援助の振り返りにより、難しかった点に気づく	「全身清拭では、患者さんを安楽にすることが難しかった。」	4
	自己の援助の振り返りにより、患者の思いや患者への影響を推察する	「患者への援助時、時間がかかり、患者に負担をかけてしまった。」	15
感情を伴いながら患者との相互関係を築く 31記録単位 10.4%	看護師や教員の技を見て看護の知識を広げる	「清拭をするときに、拭く順序を工夫する必要性があった。」	3
	患者と関わる中で、相互関係を築いていくことの困難さを実感する	「患者への援助時、時間がかかり、患者に負担をかけてしまった。」	6
	患者からのポジティブメッセージによる快感情を抱く	「コミュニケーションの難しさを知った。」	9
	患者が自分を助けてくれたと実感する	「患者から、『気持ちいい』という言葉をもらったときにはうれしかった。」	7
	患者と関わる中で、患者に同化した感情を抱く	「患者と会話するのは、大変で、患者から話しかけていただくのが、多かった。」	4
自己を洞察し自己の今後の課題を見つける 66記録単位 22.1%	患者と関わる中で、相互関係を築いたことを実感する	「病室に対して不安があると思う。」	4
	患者と関わる中で、患者に必要な援助をしたいと願望する	「最初は何ができてしまったか、笑顔が心がけ、話かけていくうちにお互いの緊張がほぐれて、いかにコミュニケーションがとれるようになっていったように感じた。」	4
	自己の姿勢や行動を客観視する	「患者にリハビリのマッサージを取り入れたほうがいいと思った。」	1
	できない自己に対する否定的な感情を抱く	「学校での練習時、マニュアルどおりに行うことだけに重点を置いていたことに気づいた。」	12
	今後、自己の成長を望む	「何もできない自分がいやになった。」	5
メンバー同士の協力や他者からのフィードバックを受け入れる 7記録単位 2.3%	自己の今後の課題を見つける	「これからは、自分も会話の中から、話題を見つけて自然な会話ができるようになった。」	16
	看護師になりたい意志を強化する	「解剖・生理などの基礎的な知識をしっかり学習するという課題ができた。」	29
	他者からのサポートに気づく	「一層看護師になりたいという気持ちが大きくなった。」	4
	メンバー同士の協力で学習の向上に努める	「仲間や指導者、先生の存在があったから乗り越えられた。」	1
	指導者からのフィードバックを受け入れる	「学生同士で、患者のニーズを情報交換することができた。」	3
		「助言を受けながら気づけなかった。」	3

をくゝで、記録単位を「」で示す。

1. 【初めて患者と関わり援助しとまどう】

このカテゴリーは、学生が、それまでの生活では体験していない看護学生として、初めて患者と関わるという体験をし、どのように関わればよいのか緊張しとまどった経験を示した。

〈患者と関わるといふ初めての体験でとまどう〉、〈過去に抱いていた患者像と異なり、驚く〉、〈学内演習とは異なる援助の方法で初めて行うことにより、とまどう〉、〈援助して予想外の患者の反応にとまどう〉の4サブカテゴリー、23記録単位で構成され、全体の7.7%を占めた。

「挨拶をするだけで緊張した。」や「患者と1対1で話すのが、初めてで、とまどった。」と表現していたように、学生は、初めて患者と関わることに對し、緊張しとまどった経験をした。また、「患者が前向きな方であり、驚いた。」というそれまで自分が抱いていた患者像とは異なっていたため驚いた経験をした。さらに、「学校で行うやり方とは異なり、とまどった。」と、学内演習とは異なる援助の方法で、初めて患者に援助することや「体位変換時、患者の組ませた手もとに戻ってしまい、清拭の順番が混乱し

てしまった。」と、予想外の患者の反応にとまどった経験をした。

2. 【直接見ることや他者と関わる中で、看護の知識を広げる】

このカテゴリーは、学生が、実習という場で直接見ることや、患者や看護師や教師と関わり、看護の知識を広げた経験を示した。

〈直接見たり触れたりすることにより看護の知識を広げる〉、〈患者に援助したことで看護の知識を広げる〉、〈患者の思考を聞き、看護の知識を広げる〉、〈看護師の思考を聞き、看護の知識を広げる〉、〈カンファレンスにより看護の知識が広がる〉、〈看護師や教師の技を見て看護の知識を広げる〉の6サブカテゴリー、124記録単位から構成され、全体の41.5%を占め、最も割合が多かった。〈患者に援助したことで看護の知識を広げる〉というサブカテゴリーは、最も割合が多かったサブカテゴリーであり、97記録単位から構成され、全体の32.4%を占めた。

「少しの騒音でも病室に響いてしまうことがわかった。」や「看護師の仕事を見て、チームワークが大切と思った。」と、学生は、直接患者の生活を見ることにより、患者が生活している様々な環境や看護師の行動を見て看護の知識を広げた経験をした。

また、患者に援助したことにより、看護の知識が広がった経験は、学生が最も多く意味づけをした経験であった。「環境整備のとき、窓を開けて換気するのは、埃の充満を防ぐのと、臭気を除去する目的があることを学んだ。」と、援助したことにより、援助の原理・原則の重要性を理解した経験や「清拭時、いかに説明や声かけが大切か改めてわかった。」と、援助しながらコミュニケーションの必要性や具体的な方法を理解した経験であった。また、援助したことにより、「ベッド柵が患者の安全にとっても大切なものであることがわかった。」と、安全・安楽の重要性や「援助する際は、患者の情報収集をきちんと行うことが大切である。」と、患者の情報収集をすることの必要性に気づいた。「患者の状況に応じて、対応させなくてはならないことを学んだ。」と個別性に合わせた援助の必要性や具体的な方法や援助による効果を実際に確認できた。さらに、学生は、援助したことにより、患者の立場に立ち、「援助にも患者中心の考えかたがあることに気づいた。」、「患者のニーズや症状にあわせた援助をするためには、基本をしっかり頭に入れておかなければならないと感じた。」と患者中心の看護の大切さや、基礎となる知識や技術を

身につける必要性に気づいた。また、「対象を理解し、アセスメントして、プランを立て、学んだ技術を応用していくことの大切さがわかった。」と看護のプロセスの大切さに気づいた経験をした。

「入院患者しか気づかない、入院生活をしていて思うことを聞き、勉強になった。」と患者の入院生活に対する思いや、「看護師の話を知ると、患者に対していろいろな対応をしていることがわかった。」と看護師の思考を聞くことにより、患者の理解や看護の役割を理解した経験をした。

「カンファレンスで、コミュニケーションは、その人に合わせた方法で行う必要があると学んだ。」と、学生は、カンファレンスで、患者との具体的なコミュニケーションの方法や具体的な情報収集の方法を理解していた。「看護師の清拭を見学し、患者に常に話しかけていて、援助を行うことによってコミュニケーションがとれることがわかった。」と、学生は、看護師の看護の技を見て、知識を広げていた。

### 3. 【自己の援助の振り返りにより自己評価し改善点に気づく】

このカテゴリーは、学生が実習において、患者に対する援助を振り返り、自己の援助の評価をすることや援助をする際の改善点に気づくという経験を示した。

〈自己の援助の振り返りにより、できない部分を自覚する〉、〈自己の援助の振り返りにより、できた部分を認める〉、〈自己の援助の振り返りにより、難しかった点を明らかにする〉、〈自己の援助の振り返りにより、患者の思いや患者への影響を推察する〉、〈自己の援助の振り返りにより、今後工夫して援助する点に気づく〉の5サブカテゴリー、48記録単位から構成され、全体の16.1%を占めた。

「清拭の援助のとき、ただ清潔にすることしか考えられず、患者の状態をみることができなかった。」と学生は、自己の援助を振り返り、できない部分を自覚した。一方、「援助をするとき、なぜその援助を必要とするのか、考えながら行うことができた。」と、学生は、自己の援助を振り返り、できた部分を認めた。また、「清拭の一回目の反省を活かし、患者の身の回りにも目を配ることができた。」と、体験したことの反省点を活かし、よりよく援助できたと認めた経験もしていた。また、「全身清拭のとき、患者さんを安楽にするのが難しい。」と援助での難しかった点を明らかにした。さらに、「患者への援助時、時間がかかり、患者に負担をかけてしまった。」と、

学生は、自己の援助が患者にどのような影響を与えたのか推察した。そして、「清拭をするときに、拭く順序を工夫する必要があった。」と学生は、今後の援助の改善点を見つけだしていた。

### 4. 【感情を伴いながら患者と関係性を築く】

このカテゴリーは、学生が、実習において患者と相互作用を築く中で、相互関係を作ることに困難感を抱くことや、患者からのメッセージや関係を築く過程で快い感情を抱くという経験を示した。

患者と関わる中で、相互関係を築いていくことの困難さを実感する〉、〈患者からのポジティブメッセージによる快感情を抱く〉、〈患者に自分が助けられたと実感する〉、〈患者と関わる中で、患者に同化した感情を抱く〉、〈患者と関わる中で、関係性を築けたことを実感する〉、〈患者と関わる中で、患者に必要な援助をしたいと願望する〉の6サブカテゴリー、31記録単位から構成され、全体の10.4%を占めた。

「コミュニケーションの難しさを知った。」と学生は、患者との関係性を築こうとし、困難感を抱いき、逆に、「患者から、『気持ちいい』という言葉もらったときにはうれしかった。」という患者からのポジティブメッセージに対し、素直にうれしいと、快の感情を抱いた。

また、「患者と会話するのは、大変で、患者から話しかけていただくというのが、多かった。」と、学生は、コミュニケーション場面で、患者に助けられたと実感した。さらに、患者との関係性が成立するに伴い、「病気に対して不安があると思う。」と、学生は、患者に同化した感情を抱き「最初は間ができてしまったが、笑顔を手がけ、話しかけていくうちにお互いの緊張がほぐれ、次第にコミュニケーションがとれるようになっていったように感じた。」と、患者との関係性が築けたことを実感した。さらに、関係性が築けるようになると、「患者にリハビリのマッサージを取り入れたほうがいいと思った。」と患者にとって必要な援助を思いついた経験をした。

### 5. 【自己を洞察し自己の今後の課題を見つける】

このカテゴリーは、学生が、実習を通して、自分自身を洞察することをしながら、今後の自己の課題を明確化する経験を示した。

〈自己の姿勢や行動を客観視する〉、〈できない自己に対する否定的な感情を抱く〉、〈自己の今後の課題を見つける〉、〈看護師になりたい気持ちを強化する〉の5サブカテゴリー、66記録単位から構成され、全体の22.1%を占めた。

「学校での練習時、マニュアルどおりに行うことだけに重点をおいていたことに気づいた。」と、自己の姿勢や行動を客観的に見つめた。また、「何もできない自分がいやになった。」と、学生は、自己を洞察する中で、できない自己に対する否定的な感情を抱いた。一方では、学生は、「これからは、自分も会話の中から、話題を見つけて自然な会話が患者とできるようになりたい。」と、今後の自己の成長を望んだ。さらに、学生は、「解剖・生理などの基礎的な知識をしっかりと学習するという課題ができた。」と、自己の今後の課題を見つけた。そして、「一層、看護師になりたいという気持ちが大きくなった。」と、学生は、看護師になりたい意志を強化した。

#### 6. 【メンバー同士の協力や他者からのフィードバックを受け入れる】

このカテゴリーは、学生が、学生同士の協力をすることや、学生や指導者や教師からのフィードバックを受け入れる経験を示した。

〈他者からのサポートの存在を認知する〉、〈メンバー同士で協力し学習の向上に努める〉、〈指導者からのフィードバックを受け入れる〉の3サブカテゴリー、7記録単位から構成され、全体の2.3%を占めた。

「仲間や指導者、先生の存在があったから乗り越えられた。」と、学生は、他者からのサポートの存在を認めた。また、「学生同士で、患者のニーズを情報交換することができた。」と、学生は、他の学生と、協力し、学習の向上に努めた。さらに、学生は、「助言を受けるまで、気づかなかった。」と、指導者からのフィードバックを受け入れたことにより、自己に気づかされていた。

### 考 察

基礎看護学実習Ⅰにおいて学生が意味づけした経験には、【初めて患者と関わり援助しとまどう】【直接見ることや他者と関わる中で、看護の知識を広げる】【自己の援助の振り返りにより自己評価し改善点に気づく】【感情を伴いながら患者と関係性を築く】【自己を洞察し自己の今後の課題を見つける】【メンバー同士の協力や他者からのフィードバックを受け入れる】の6つのカテゴリーが内包されていることが明らかになった。以下、この6つのカテゴリーの内容と特徴、有効な教授活動について考察する。

【初めて患者と関わり援助しとまどう】経験は、学生がそれまで体験したこととは大きく異なり、とまどうという経験であった。辻<sup>8)</sup>は、個人的理論の基

本的機能の一つとして、人は経験データを同化して人生の種々の問題を解決すると述べているが、基礎看護学実習Ⅰは、初回の実習であり、看護学生として患者と関わるという体験は初めてである。問題解決する際に、過去の経験データがないため、その課題を解決するにあたり、緊張感を伴い、とまどう。小山<sup>9)</sup>も実習記録である「日々の記録」から、「初めての实習に対する心情」を明らかにしているが、学生にとって、初めての实習は、とまどう場面が多い。

また、過去の体験から、一般的な患者を学生なりにイメージ化していた。しかし、実際患者と初めて出会い、過去の患者像と比較し、イメージと異なっていたため、驚くという経験をした。

したがって、初回実習は特に、学生は緊張し、とまどうため、学生を精神的に支え、学生の姿勢や行動を承認していくことが重要である。ときには、学生と患者と教師あるいは、指導者という三者で、コミュニケーションをはかりつつ、学生が患者と関わっていけるよう働きかけていく必要がある。また、学生は、新たな患者像を作り変えていくことにつながるが予測される。そのため、実習において少数の患者と関わりイメージ化をはかるのではなく、できるだけ多数の患者と関わり学生の患者のイメージ化がはかれるようにしていく必要がある。初めて患者と関わり、援助するする体験をしているが、例えば早期体験実習において患者と初めて関わるという体験をさせ、患者のイメージ化をはかり、時期において患者に初めて援助をするという実習形態を考慮していくことも一方法であると考える。

【直接見ることや他者と関わる中で、看護の知識を広げる】経験は、学生が様々な手段を活用し、看護の知識を拡大していく経験であった。この経験は、最も割合の多い経験であることから、学生にとっては、最も意味のある経験としてとらえていると考えられる。臨地実習という教育形態は、看護実践能力の育成においては、重要な意味を持つ<sup>10)</sup>と示しているように、まさに、看護実践能力の基礎である看護の知識を広げていく経験である。中でも、患者に援助したことで看護の知識が広がるのが最も多い。これは、臨地で患者に関わり、援助したからこそ知りえた臨床の知である。また、学生は、患者の思考や看護師の思考を聞くことにより知識を広げている。看護の対象である患者の生の声や看護師が普段思っていることを聞くことより、学生は、看護の知識を広げていく。さらに、カンファレンスで、コミュニ

ケーションや情報収集の具体的な方法の知識を得ている。カンファレンスに参加するメンバーは、学生・臨床の看護師・教師であり、学生同士でお互い困っていることを共有しながら、討議し、加えて、看護師や教師の助言によって学生は知識を広げていく。また、学生は、臨床の場で、看護師や教師の患者に対する援助を見ることによって、看護の知識を広げていく。

したがって、患者や看護師が看護に関連した自分の思いや考えを学生に伝えられ、学生がそれを受け止められるような環境の調整が、教師には求められる。また、カンファレンスでは、活発に学生同士の意見がはかれるよう、また、不足する場合には、指導者からの助言を積極的にしていく必要がある。さらに、看護師や教師の技を学生は、見て知識を得ていることから、学生のロールモデルとなるように、個人の看護実践能力を高めていくことが求められる。

【自己の援助の振り返りにより自己評価し改善点に気づく】経験は、自己の援助の振り返りによる経験であった。自己の援助を冷静に振り返って、できた部分や反対にできなかった部分や難しかった点を明確化する。さらに、自己の援助による患者の思いや患者への影響を考えることにより、自己の援助に対する評価をし、今後工夫して援助する点を明らかにする。学生は、分析的な思考を求められているが、自己の援助を振り返り、非分析的な直感的思考により、推察し創造性を働かせ、自己評価している。援助による患者の反応を、一方的に決めつけるのではなく、考えられる範囲で推察していくことは、これからの実習で、様々な判断をする材料になると考える。

したがって、教師は、自己の援助を振り返る場合に、より分析的な思考を働かせる必要性を学生にわかるよう伝える。また、実習の初期の段階は、直感的な思考により、創造性を働かせることを否定せず、患者の思いや影響を推察することも大いに推奨していくことが重要である。

【感情を伴いながら患者と関係性を築く】経験は、患者との相互作用による関係性を築く過程の経験であった。患者と関係性を築く過程において、学生は、関係性を築くことに困難感を抱く。一方、関係性を築く過程で、患者からのポジティブメッセージにより快感情を抱き、コミュニケーション場面で患者に助けられたと実感している。ポジティブな感情は、対人交渉における協調性、協力性や協力的行動を促進し、他者との会話の志向性を促進し、他者への好意

の表出の促進、他者への攻撃性の抑圧、説得的コミュニケーションにおける、受容性を促進することが示唆されている。<sup>9)</sup>つまり、患者からのポジティブメッセージによる快感情を抱いたことは、患者への好意の感情を促進し、患者との関係性を促進し、患者に対する援助活動を発展させる感情であるといえる。また、患者に助けられたと実感したことは、援助者としての思考ではないが、学習者として患者に好意を抱いた感情ととらえることができる。患者との関係性を築く過程では、重要な経験と考えられる。また、患者に同化した感情を抱き、患者との関係性が築けたことを実感し、患者にとって必要な援助を思いついた経験をしている。これらの経験も決して、分析的思考とは言えない経験ではあるが、学習者として、患者に同化した感情を抱いたことをきっかけに、直感的に患者に必要な援助を思いついているとも考えられる。また、井上<sup>10)</sup>は、実習における看護学生の意味化した経験の構造を明らかにしている。その構造は、学習活動への意識を軸とした、生活者から学習者、さらに援助者への自己意識の発展を示すものであるとしているが、看護学生の一年次の段階での経験も、学生は、生活者としての視点や学習者としての視点で患者との関係性を築きつつ、援助者としての意識が芽生え始めていることがわかった。

したがって、学生が、患者と関係性を築く過程において、教師は、学生を見守り、コミュニケーションの具体的な方法を助言していくことが重要である。また、いまだ援助者としては未成熟な、学習者としての素直な感情を否定することなく、その感情から、援助者としての思考を発展させていけるような関わりが重要である。

【自己を洞察し自己の今後の課題を見つける】経験は、自己を客観視した経験であった。自己の姿勢や行動を客観視し、自己の今後の課題を見つける。その一方で、できない自己に対する否定的な感情を抱く経験もしている。学習初期の段階で、できないことを今後の課題に結びつけられれば、学習への動機づけにつながるが、できない自己に対する否定的な感情は、その後の学習に悪い形で影響することが考えられる。したがって、教師は、学習の初期の段階にある学生の自己に対する否定的な感情を表出させ、その感情を否定するのではなく、その感情を受け止め、今後の学習の動機づけにつながるような関わりが重要である。また、秋元<sup>11)</sup>は、「学生に、臨床というリアリティーの中で主体的看護実践を保証す

るためには、指導者が絶えず学生の傍らに居ること、そして、指導者がケアに卓越していることが求められる。」と指摘している。学生は、臨床という場で、緊張し、何もできない自己を否定的にとらえる経験をしており、学生の能力を見極め、患者への援助を共に行い、自分の果たしている役割の重要性を考えさせる必要がある。さらに、学生は、看護師になりたい気持ちが増強していることを認識しており、今後の学習の動機づけにつながっていると考える。

【メンバー同士の協力や他者からのフィードバックを受け入れる】経験は、他者のサポートの存在を認め、学生同士協力し、指導者の助言を受け入れる経験であった。学生は、同じ実習場所に4ないし5人で実習をしている。そこでは、学生同士が協力し、学習の向上に努め、同じ学生同士の立場でのサポートや教師や指導者というまた異なる役割を担う他者からのサポートがあることを意味がある経験ととらえている。しかし、この経験は、少数であり、学生は、他者の存在を認めつつ、患者との主体的な関わりを重点的に意味のある経験ととらえていることがわかる。

したがって、教師は、グループダイナミクスが十分はかれるよう、学生同士の調整をはかり、また、個々の学生の学習の進行や心理状況に合わせ、教授活動をしていく必要がある。

以上、本研究によって明らかになった、学生が意味づけした6つのカテゴリーについて、その内容と特徴、有効な教授活動について考察した。今後、研究対象を増やし、この結果の精度を高め、学生の専門職業人への成長過程でカテゴリーの順序性について検証していきたい。

## 結 論

看護学生57名を対象に、基礎看護学実習Ⅰにおける学生が意味づけした経験内容を明らかにするため、29名の学生のレポート記述内容を分析した。

1. 学生が意味づけした経験は、6つのカテゴリーに統合された。
2. カテゴリーのうち、【直接見ることや他者と関わる中で、看護の知識を広げる経験】は、最も意味のある経験としており、全体の41.5%を占めていた。その中でもく患者に援助したことで、看護の知識を広げる経験は、最も多いサブカテゴリーで、全体の32.4%を占めていた。
3. 学生は、く自己の援助の振り返りにより、できな

い部分を自覚する)、くできない自己に対する否定的な感情を抱く)というネガティブな経験をしてきた。

4. 学生は、援助者としては、未成熟な学生としての素直な感情を抱いていた。
5. 教師は、学生が意味があるとしている経験を認め、学生に関わることが重要である。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて。平成14年度看護学教育の在り方に関する検討会報告書。2002。
- 2) 安酸史子：経験型実習教育の考え方。Qual Nurs, 5: 568-576, 1999。
- 3) 山下暢子, 舟島なをみら：看護学実習における学生の経験に関する研究, 第15回日本看護教育学会講演集, 161, 2005。
- 4) 小松万喜子, 桂晶子ら：第11回日本看護教育学会講演集, 199, 2001。
- 5) 小山英子, 永田美和子ら：基礎看護学実習Ⅰにおける学習内容・心情の分析—日々の実習記録「まとめ」の記述から—。桐生短期大学紀要, 14: 39-44, 2003。
- 6) 鶴羽美紀, 吉崎幸子ら：初回臨地実習での学生の思考, 第36回日本看護教育学会抄録集—看護教育—, 161-163, 2005。
- 7) Berelson.B: 稲垣三千男ら(訳): 内容分析。みすず書房(東京), 1957。
- 8) 辻平治郎: 自己意識と他者意識。北大路書房(京都), 1-79, 1993。
- 9) Carnevale PJD, Isen AM: The influence of positive affect and visual access on the discovery of integrative solution in bilateral cognition. Organ behave hum perform, 37: 1-13, 1986。
- 10) 井上映子, 峯馨ら: リハビリテーション看護実習における学生の意味化した経験の構造。Kitakanto Med J, 55: 225-234, 2005。
- 11) 秋元典子, 森本美智子ら: 看護への動機づけを促進する臨床実習指導の方法。Qual Nurs, 10(8): 783-794, 2004。

# Study on Significances of Student's Reports after Fundamental Nursing Practice I

Naomi Asai, Hiroko Joboshi, Eiko Koyama, Sonoo Miki

## Abstract

The characteristics of experiences reported by students after nursing practice were investigated in order to evaluate the effects of learning activities of fundamental nursing practice I. Twenty nine freshmen enrolled at nursing department of junior college were subjected to this analysis and 299 experiences extracted from the reports using inductively oriented quantitative research method were analyzed. As a result, the significances reported by students were classified into 29 categories, which were integrated into 6 categories by the similarity of meanings: (1) Bewildered when involving with patients for the first time, (2) To expand the nursing knowledge through directly observing or involving with others, (3) To review and evaluate the way how one involved with others and find the points to be improved, (4) To develop cordial relationship with patients, (5) To have an insight of oneself and seek for the issues to be achieved in future, (6) To receive coordination and feedback from others.

Keywords: Fundamental nursing practice, Nursing students, Experience, Report